

04-1 ネパール・ポカラ市母子保健プロジェクトに携わった本邦関係者の質的变化

大野麻美、吉川里美、北原照美（ネパール交流市民の会）

キーワード：母子保健、質的变化、JICA 草の根事業

要旨：本プロジェクトに携わった本邦関係者の質的变化を明らかにすることを目的とし、結果①共通点を発見し共感を得る喜び②自身の知識・技術を再認識し他者に伝えることで得るやりがい③互いに関心を持ち“近所の人と関わるような感覚”で交流をすることの大切さへの気づきという質的变化をもたらし、それらがプロジェクトの成果、持続性の一助になっていることが示唆された。

A. 目的

本プロジェクトはネパールの母子保健改善のために、2015年より駒ヶ根市と協働で、国内の様々な保健医療関係者に協力を仰ぎ、かつ一般市民と共に活動を重ねてきた（フェーズ1：2015年3月～2017年3月、フェーズ2：2017年6月～2021年5月、フェーズ3：2023年1月～2025年6月）。当初本邦関係者からは、「海外のことは分からなくて不安」といった思いが聞かれたが、活動を進めるにつれ「喜びややりがい」へと変化していく様子が見られた。そこから、興味関心をもって協力活動を行う学生から高齢者までの住民の層を厚く広く持つことが、結果としてネパール・ポカラ市の母子保健の改善につながるのではないかと考えるようになった。以上より、本調査はプロジェクトに携わった本邦関係者に与えた影響を明らかにすることを目的とし、それがプロジェクトの成果、持続性にどのようなつながっていくのかを検証した。

B. 方法

調査期間は2020年6月～12月だった。調査対象者は本邦研修受入医療機関の助産師5名、プロジェクトマネージャー1名、母子保健専門家2名の計8名で、「プロジェクトに関わったことによる気持ちの変化」「大変だったこと、どのように乗り越えたか」「今後取り組んでみたいと思うようになったこと」等を調査の問いとし、個別もしくはグループインタビューにて半構成的面接を行った。面接で話した内容をコード化し帰納的に分析した。倫理的配慮として、文書と

口頭で「調査への参加の自由」「個人情報の保護（匿名化が困難である箇所は個人が不利益にならないようにすること）」「学会での発表の可能性」について説明し、書面にて同意を得た。

C. 結果

調査の結果、最も質的变化の発言が多くみられたのが協力医療機関の助産師であった。助産師は、本プロジェクトからの依頼で初めて国際協力に触れていた。「今までは海外に行かなくてもいいと思っていたが、助産師という仕事を通じて日本以外の国の実際を見るのもいいかなという気持ちになった」「プロジェクトに関わったことで自分でもこんな国際貢献ができるだと再発見し、視野が広がった」と視野が世界へと広がった思いが語られた。また、ネパール研修員の熱心で真摯な受講態度に触れたことで、「自分が教えるだけでなくネパールの事について知りたい、学びたいという姿勢に関わる」ようになったり、ネパールのお産に関する知識、技術を教えてもらうことで、「お産は国が違ってても共通部分があると改めて感じる事ができた」「相手に寄り添う気持ち、人のためにケアをするという思いはネパール人も同じであり共感できた」という異なる文化習慣の国であっても、共通点が存在するという実感へとつながっていた。さらに研修は、他者から自身の知識、技術が認められる機会となり、「当たり前と思ってしていたことに感動、感心してくれ、改めて自分がしてきたことは間違っていなかったと認識させてもらった」と自分のお産への向き合い方に他者が評

働してくれたことへの嬉しさを感じていた。あわせて、「ネパールに限らず、日本の助産師にも乳房マッサージの技術やお産の技術を教えることが大切だと思えるようになった」と後進へ自分の思いや技術を伝えていきたいという意識の変化が語られた。

プロジェクトマネージャーおよび母子保健専門家は「長期滞在をし、現地の人と苦勞を共にする経験をすることができ自分の人生にとって核となるような体験ができたと感じている」「日本人は便利さを追求しすぎている感じがするが、ネパール生活を通して資源を無駄にしない、シンプルな生き方を学んだ」「喜怒哀楽は世界共通であり、文化、宗教は関係ないと学んだ」「文化習慣は違ってても根本的なところではみんな同じであるという視点をもつようになった」という、長期在住したことによる、自身の考え方の変化、共通点の発見について語られた。また、「私にとっての国際協力とは、ご近所付き合いの延長であり、それは“向き合っているあなたたちと共に良い世界を目指したい”という思いである」と“支援する・される”ではなく、近所付き合いのような関係性で国際協力を捉えて関わるようになったことが語られた。同時に、ネパール人スタッフに母子保健・医療の知識、技術を伝えるうえで、日本とは異なる技術や看護観への介入の困難さや地位が障壁となることでネパール人スタッフを巻き込む困難さも感じていた。そのような困難さを抱えながらも、多職種を交えたワークショップを取り入れたり、健康教育で劇を取り入れたことでカーストや地位を乗り越え、かつネパール人の前向きな性格、アウトプットする力が母子保健・医療の知識・技術の向上、看護観によい効果をもたらしているのではないかと感じていた。

D. 考察

以上より、本プロジェクトに関わったことにより、本邦関係者に①共通点を発見し共感を得る喜び、②自身の知識・技術が世界へとつながることを認識し、それを他者に伝えることで得る

やりがい、③ネパール人に関心を持ち、国際協力と構えずに“近所の人と関わるような感覚”で交流をすることの大切さの気づきが見られ、質的な変化をもたらしていたことがわかった。互いに関心を持ち、顔が見える関係で交流することで、信頼関係が生まれている。あわせて助産観や喜怒哀楽の共通項に目を向け、国という概念を取り払うことで、相手をより身近に感じることができ、相互から学ぼうとする姿勢がプロジェクトの成果および持続性へとつながっているのではないかと考える。さらに、プロジェクトに関わったことで活動の幅が広がり自己成長へとつながっており、それらの影響は通常の事業評価のみでは表しにくいプロジェクトの重要な成果であると考えられる。JICAが作成した「簡易プロジェクト・エスノグラフィー（以降、プロエス）作成ハンドブック」の中で佐藤は、プロエスは「プロジェクト」に関わる人々が日々何を感じ、どのようにプロジェクトを受け止めてきたのかを記述する作業であり、関係者の物語を紡ぎ出すことが、評価の現場でも意味があるのではないかと述べている¹⁾。本プロジェクトを通じて、ネパールの人々に関心を持つ専門職、住民が多く存在し、ネパールの母子保健の課題を自分事として捉えるようになってきている。結果、それらの関係性がプロジェクトの成果につながり、持続的な協力関係が現在のプロジェクト終了後も続いていくことが予想される。このような関わりこそが真の協力活動ではないかと考える。

E. 今後の展望

ネパール側にも本調査を実施しており、今後は双方向から分析をし、総合的に評価を行っていく。

F. 利益相反

利益相反なし。

G. 文献

- 1) JICA：簡易プロジェクト・エスノグラフィー作成ハンドブック（初版）. pp4-8. JICA. 2018.